



診察室の午後

白浜はまゆう病院
泌尿器科部長 川嶋 秀紀

米国留学から帰国して1きく手を振っていた。私た
年ほどたったころ、大病院 ちは、オープンテラスのあ
院で勤務医をしていた私 るレストランが並んだ石畳
に、薬物代謝に関する国際 の道を歩き、古い建物に囲
学会から手紙が舞い込んで まれ三美神の彫像と噴水の
きた。翌年(1998年) ある広場をぬけ、学会会場
夏にフランスのモンペリエ に向かった。受け付けを済
で開催予定の学術集会で、 ませ発表が行われている暗
講演をしてほしいという招 いホールに入ると、正面に
待状であった。留学中にお 映写されるスライドと演壇
世話になったS教授が推薦 だけが明るい中、各国から
してくれた

のだ。
モンペリ
エは地中海
から10*ほど内陸にある南
仏の都市で、ノストラダム
スが在籍したというヨーロ
ッパ最古の医学部がある。
翌年の夏、モンペリエ空港
に着いた私は市の中心部に
あるホテルに向かった。ロ
ーマ時代の水道橋が残る街
の、石造りの古い建物は、
青い空のもと、南仏の夏の
日差しを受けて白く輝いて
いた。S教授とは翌朝落ち
合うことになっていた。

<57>「モンペリエの夏」

ロビーに現れた背の高い
S教授は懐かしい笑顔で大
もん分かつてきた時代であ

った。ヒトの全ゲノムが解
読される前夜であった。
お昼になり、石畳の通り
のオープンカフェに陣取っ
たS教授と私の前を、学会
参加者が通った。私たちが
見ると次々にテーブルを囲
む人が増え、ワインパティ
イーとなった。お互いがど
のような研究をしているか
知っていた。競争相手もい
た。ただ、研究者たちは仲
がよく自由に底抜けに明る
かった。

翌日は発表が早く終わ
り、皆で貸し切りバスに乗
り、レセプション会場に向
かった。にぎやかな乗客を
乗せたバス
は、夕刻でも
日が高い、夏
の南仏の田舎

道を走った。傾いた日差し
が広大なカマルグ湿原を柔
らかく照らしていた。途中
エグ・モルトという中世の
城壁都市を観光し、カマル
グ自然公園にあるテント張
りの屋外会場に着いた。ワ
インと食事と談笑がいつま
でも続いた。
今振り返れば、20世紀の
世紀末、私たちが未来に対
して漠然と抱いていた明る
い期待は、幻想だったのか
もしれない。